
サディスティック・ラヴァー

太郎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サディスティック・ラヴァー

【Nコード】

N1914E

【作者名】

太郎鉄

【あらすじ】

妹、瑞穂が失踪した。おれは瑞穂の恋人であり、幼なじみでもある京介とともに、瑞穂の行方を追う。京介はいう。「おれはお前の生まれ変わりだ」占い師はいう。「あなた、煉獄にいるぜよ」恋人のマリナはいう。「あなたが愛してるのは瑞穂ちゃんだけよ」おれは誰が憎いのか。おれは誰を愛しているのか。瑞穂の消息が、全ての鍵を握っていた。

煉獄 一（前書き）

久しぶりの投稿になります。週二〜四程度の頻度で更新し、二月以内には完結させる予定なので、暇潰しに読んで頂ければ、幸いです。

煉獄 一

なあ、生まれ変わりって信じるか、と、唐突に京介がいつてきたので、おれは信じない、と答える。

「どうやらさ、おれ、お前の生まれ変わりらしいんだ」

京介はおれの回答を無視して続けた。四月だというのに、三日連続で三十度を超えた異常気象に、頭がやられてしまったのかもしれない。おれは自販機でミネラルウォーターを購入して、土手に寝そべっている京介の頭に中身をぶちまけてやる。

「つめた」

嬉しそうに京介は髪をかきあげる。その仕草は、京介の中性的なルックスもあいまって、どこかアイドルじみていた。河川敷の方から、何人かのビッチが京介にとろけそうな視線を送る。

「生まれ変わりなんだよ」

また、意味のない言葉をはく京介の頬を、はたく。

「うるさい。しゃべるんじゃないやねえよ無能が。このくそ暑い中呼び出しやがって。大事な用件だ？ てめえの腐った脳みその話におれの貴重な時間をよくも無駄にさせやがったな」

そう言うなって、と京介は笑って立ち上がる。昔から、脳天気な男であって、怒るということを知らない。

「思い出したんだよ。瑞穂に気をつける」

瑞穂とは、高枝瑞穂であり、おれの妹で、京介の恋人でもある。おれは京介の口から瑞穂の名前が出ることをあまりよく思わないし、それは当人もよく知っている。

然り、おれは京介の胸倉を掴み、顔面を引き寄せ、恋人にするように、頭突きを鼻っ柱に叩き込む。

鼻血を出した京介は、痛みを屁とも思わないのか、気をつけろ、と繰り返す。

「お前、あいつに殺されるぞ」

延々炎炎

占い師はいう。あなた、煉獄にいるぜよ、自覚あり？

彼は頭にバンダナを巻き、その上にキャップをかぶっている。そしてそれ以外には何も身につけていなかった。年は二十歳前後。渋谷の小さなクラブの中で、DJブースに水晶を置いている。

名をジョニーと名乗るその男に、おれは訊いた。

「煉獄って、なんだ」

「天国と地獄の間ぜよ。あなた、灼かれるよ、てか、灼かれてんぜ、熱いぜよ」

彼はそれだけいうと、ブースをいじくりまわし、ホールに音楽を流した。ラテンと日本のポップスが融合したような、軽快なリズムとメロディー。タイトルはフル・ヌード・パラダイスと同じマラならしこらにゃそんなん。

ホールにたむろしていた若者たち　大抵はシャブ中とビッチは、誰も彼も衣服を脱ぎ捨て、全裸で踊り狂う。やがてビッチがシャブ中のペニスをくわえ始め、シャブ中がビッチを貫きはじめる。

困ったな、とおれは思う。瑞穂はどこにいるのだろう？　もし万が一にでも、瑞穂がこのビッチの中に混ざり、シャブ中に犯されようものなら、おれはここにいる全ての愚者を断罪、つまりは虐殺するだろうし、そんなことをすればおれは国家によって首をくくられるだろう。

「ジョニー」

おれは耳を塞ぎながら、声を張り上げる。ジョニーはおれに目もくれず、DJブースを抜け、ホールに出た。おれはジョニーの背中になあと尋ねる。

「高枝瑞穂って女を知らないか？　ここによく出入りしてるって聞いたんだが」

「知ってるぜよ、瑞穂は、よくここに来るが、来るくせに脱がない女の子ぜよ」

振り返らずにジョニーが答えた。おれは安堵する。この狂騒の中においても瑞穂は自分を見失っていないのだ。

「今日は来てないぜよ、一発でわかるなり、この中で服を着てるのは、いつもなら瑞穂だけだし、今日はあなたただけだしね」

それとわかればこんな場所に用もないおれは、出口を目指した。喘ぎ声がおれの鼓膜を刺激したが、低俗なセックスに反応する性欲は持ち合わせていない。

「また来るといい」

分厚い扉に手をかける間際、ジョニーに肩を叩かれた。

「ここは、あなたみたいな人に、必要な場所なんぜよ」

ありがとう、遠慮しておくよ、と、おれは笑顔でジョニーの手を振り払い、クラブを出た。

渋谷のファミリーストランで軽く夕食を済ませ、マンションへ帰る。その合間に四度瑞穂に電話したが、いずれも繋がらず、代わりに京介に電話した。

「どうしたよ」

「お前、本当に瑞穂の行方知らないんだろうな」

「知らないよ」

「さっきお前が言ってたクラブに行った。なんだありゃ？　なんであんなところに瑞穂が出入りしてるんだ」

「さあ、ジヨニーっていうよく当たる占い師がいるってことだけしか、瑞穂はいつてなかったからなあ。あんなとこって、悪ガキどもの溜まり場だったのか？」

「変態どもだよ。そんなことより、瑞穂から連絡あったらすぐにおれに伝えるよ。反故にしたら、マジでお前、命ないぞ」

「おれはお前の生まれ変わりだ。安心しろ、伝えてやるよ」

「死ね」

通話を切る。京介と喋るのはおれにはストレスに他ならない。それは幼い頃から変わらない。おれは京介が嫌いだ。京介はおれを虚飯にしている。おれの憎しみを糧にして生き、その為に自らおれの憎しみを促進させる。

おれはお前の生まれ変わりだ。

凄まじい嫌悪感が五臓六腑を刺激する。おれの憎しみを駆り立て、さらなる暴力を要請する。これが京介の手だ。ありとあらゆる手段で、おれに自分を殴らせようとする。おれは京介のピエロであり、玩具であり、恋人だった。

部屋に戻り、冷蔵庫に縛り付けている全裸のマリナの乳房を、皮のベルトで打った。恍惚とした表情でマリナはいう。

「もつとぶって。一日中ほっとくなんてひどいよ」

おれは京介への憎しみを、マリナへの愛情に変換させる。それは、ローマ字を仮名に変換させるより素早く、また、食物が胃の中で排

泄物に変わるのと同じくらい当たり前のことだった。

マリナの乳房にどす黒い筋が入れば入るたび、おれの内なるどす黒い憎悪は消えていく。

おれはマリナの頬をなぜる。そして打つ。なぜ、打ち、なぜる。繰り返す。マリナが意識を失えば、戒めをとき、冷水で満たされた風呂の中に叩きこむ。

意識を取り戻したマリナに、一日中縛られっぱなしで足元がおぼつかないマリナに、おれは直立を命令する。傷だらけのマリナ。瞳は恍惚とし、膣はぬめっている。おれはマリナを抱きしめ、愛してる、と囁く。愛してやまないと、お前がいない世界に存在理由など有り得ない、と。

「嘘つき」とマリナはいう。

両手を壁につかせ、おれはそこでようやくマリナを貫く。喘ぎ声がバスルームに反響していく。嘘つきというフレーズが混ざる。でも、いいの、という声加わる。

「私を愛さないで」

「あなたが愛してるのは瑞穂ちゃんだけでしょっ」

「だからあなたが好きなの」

あなた、灼かれてる、ぜよ、と、ジョニーの声が混ざる。

煉獄 二

ベランダで煙草を吸う。マリナは煙草が苦手で、おれは彼女の体がニコチンの毒素で汚されることを嫌った。

紫煙は夜風にさらされ、街の光に溶ける。はずが溶けず、煙は体を成し、やがて瑞穂に形成され、さらにジョニーへと変化する。もちろん、こんなものは幻覚に過ぎないが、おれは幻覚と対話することに慣れている。問題は瑞穂であつた紫煙が、先ほどあつた正体不明の変態占い師に変わってしまったことだ。

汚らわしく、不愉快極まりない。

「消え失せやがれ」

「いったぜよ、あなたは煉獄にいる。これもさ、煉獄における浄化だつて」

「意味不明だな。浄化だ？ 瑞穂がてめえのような変態に変わることで何が浄化されるんだ」

「あなたの罪」

おれはジョニーである煙を殴りつけ、拳は当然空を切り、それでも煙は、ようやく闇に溶けた。

瑞穂 妹。

おれは確かに、瑞穂を愛している。肉親以上の感情における愛情

だ。だが、それがなんの罪であるというのか。罪深いのはおれと瑞穂を兄と妹というカテゴリーで産んでしまった両親であり、さらに突き詰めればそのような運命をプログラムした神に他ならない。

第一、おれは妹に対する愛情を精巧に隠してきている。それを見破ったのは京介とマリナだけだ。さらにおれはこの二人に対しても、それを認めてはいない。

自白しなければ、おれの罪は、本質的な意味で暴かれることはないだろう。

それにおれは、瑞穂と同様にマリナを愛している。天平に掛ければそれは見事に均衡を保つほど、同等の愛を注いでいるのだ。

それなのに、だ。

なぜ、おれが罪深いのか。なぜ、瑞穂が消えなければならないのか。

憎しみの行きつく先は、結局京介だった。おれは、内なる心の世界で奴をありとあらゆる残酷な手段で殺害し、再生させ、さらなる殺害を繰り返してきた。

奴が奪ったのだ。おれの憎しみを食らうことでしか生きることの出来ないあの男が、おれから瑞穂を奪った。

瑞穂に殺される？ おれが？

それはおれの望むところだ。瑞穂に殺されるというのはおれの死に方としては最上級に位置するだろう。

しかし赦せない。奴は自分が

「おれの生まれ変わりである」と断言したうえ

「瑞穂に殺される」ことを

「気をつける」と注意を促す。

瑞穂に

「殺される」理由は見当たらないが、瑞穂に

「殺されない」方法の死もまた見当たらない。

わかっている。そもそものはじめから、おれは瑞穂に殺されたいのだ。京介に奪われた瑞穂が、おれの腕で眠ることのない瑞穂が、永劫におれの愛を受け入れることのない瑞穂がいる虚無の世界から、せめて瑞穂の手で消し去って欲しいのだ。

京介は悪魔の洞察力でおれの本心を見抜き、そしておれから大往生さえ奪い、無限の憎しみを得ようとしている。

そうなのだ。いずれ、近い内に、おれは京介を殺さなければならぬだろう。頭の中で幾度もシミュレートしてきた光景を実現しなければならぬだろう。

そう。瑞穂が見つかると同時に。

延々炎炎

実際、おれはお前が好きだよ、と京介はいけしゃあしゃあという。

それがおれにとって最悪の侮蔑であると知りながら。

「何でさ、お前はそんなにおれを嫌うかな」

百人町の安い居酒屋だった。カウンター席のみの、十畳にも満たない空間で、おれは奴と隣り合わせに座っている。

手酌で日本酒を一号空けたあと、京介の戯言を無視しておれは本題を切り出した。

「この一週間でわかったことは？」

瑞穂が失踪してから一ヶ月。おれ達は週に一度、瑞穂の消息についてお互いが集めた情報を提示し、まとめる。

「あまり進展はしてないな。あのクラブにはおれも昨日行ったけどさ、最近は全然見なくなっちゃって」

出汁巻き卵を口に運びながら、のんびり喋る京介。もし、ここが居酒屋でなかったら、人目がまるでなかったのならば。おれは京介の箸を奪い取り、喉仏に突き刺していたに違いない。

「ふざけんなよこら」

京介に通用しないことがわかりつつ、おれは押し殺した声で恫喝した。

「てめえは瑞穂の恋人だろうが。なんでそんなにのりくらりとしてやがる。まるで、瑞穂がいなくても何の問題もないような、てめえの態度はなんなんだ？」

目もくれず咀嚼を続ける京介は、やがてゆっくりと卵を飲み込み、

「瑞穂のことは愛してるよ。それに知ってるんだ。瑞穂が自分の意志で消えたことは」と漏らす。

「だから、彼女の安否については、おれは心配してないよ」

「おれを、馬鹿にしてんのか？ てめえ、はなから瑞穂が消えるのをわかってたつていうのか？」

知っているのだ。京介は。俺よりも。実の兄であり、他の何者よりも瑞穂を愛している俺よりも、瑞穂のことを。

おれにはそれが何よりも赦せない。おれにはそれが何よりも耐え難い。

「知っていたわけじゃない」と京介はいう。

「ただ、なんとなく、そうなるだろうと予測していただけだ」

京介はビールを頼んだ。おれは唇を噛み締め、そこから滴る血を飲み込んだ。

「てめえは止めたのか？ 瑞穂が消える兆候を感じとっていて、てめえはそれを止めたのかよ？」

「いや」と京介は答える。

「止めなかった」

「何故だ！？」

思わず怒鳴ってしまう。店主が、まばらな客が、驚愕と不愉快を混じりあわせた視線をおれ達に送ってくる。

「お前の為さ」

開いた口が塞がらない、というのは、このことだ。血の混じった唾液が糸を引いてこぼれるまで、口を開け放しにしていることに気がつかなかった。

「京介、お前、何て言った？」

「お前の為、だよ。この前も言っただろう？ お前は瑞穂に殺されるんだ。おれはそれを止めたかった。止めたかったが為に、瑞穂を止めなかった」

横目で京介を伺った。奴を正視することなど、今の俺には不可能だ。しかし、おれの横目を京介は正視する。長年おれ達の間に存在した絶対的な隔たり。おれの怒りが臨界点を超え、憎悪という名の糧に変質した瞬間、それは実体を伴っておれと京介の世界を分断する。

スモークがかかるのだ。京介の表情はかすみ、ゆがむ。電波状態の悪いテレビ画面のように。

たゆたう京介の顔が、一瞬、整う。整ったその顔はおれのものだ。おれには何故、刹那にでも、京介がおれに見えるのかが理解出来ない。恐ろしくおぞましい。憎悪は氷結し、固形化する。黒の塊が、おれの口から京介の口へと、吸い取られていく。

悪寒におれの肉体は震える。カウンターに突っ伏すと、その振動

はやがて安酒屋全体に伝わり、さらには日本列島に大地震を巻き起こす。

「意味が、わからねえ。お前は、何がしたいんだ」

瑞穂が消えることをよしとする京介。その瑞穂の搜索をおれともにもに継続する京介。

「お前は何がしたいんだ。瑞穂は、どこへ行っただ」

うつ伏せのまま、視界を暗黒に委ねて、おれはうめいた。瑞穂が闇に浮かび上がる。彼女は全裸だった。彼女の体中には、かつておれが加えた暴力の痕がくつきりと残っている。

「お兄ちゃん」

「瑞穂」

「私を捜さないで」

「何故だ」

「京介を憎まないで」

「何故だ」

愛おしそうに、瑞穂は脇腹のあざを、乳房についた無数のミミズ腫れを、なでていく。瑞穂がなげた部位に、オレンジ色の炎が一筋の電光のように走っていく。

「京介はお兄ちゃんの生まれ変わりだから」

瑞穂に罵声を浴びせたいおれは、しかし瑞穂に、愛の言葉以外囁くことが出来ないおれは、呪詛のような瑞穂の言葉を、否定も肯定も出来ずにいる。

「そして、私は、京介の生まれ変わりなの」

暗黒がひび割れ、それは瑞穂の体を両断する。そして瑞穂の半身はそれぞれ真つ赤な炎に灼き尽くされ、おれはただ、虚無の世界に、一人立ち尽くす。

煉獄 三

夢は、おれにとってアルバムと同義だった。おれが見る夢は全て過去の事象であり、それらは一切の改変も、改善もされず、主観視点で展開されていく。

今、おれは小学六年生で、夏休みの宿題をこなしている。傍らの二段ベッドには、小学四年生の瑞穂が、安堵の表情で眠りについている。

ベッドは一つがいい。この頃のおれは、両親にそれをひたすら要求していた。間もなく思春期を迎えるであろうおれの要求を、両親は怪訝そうに顔を見合わせて却下するのだ。

瑞穂　妹であり、この時点ではおれの恋人だった。おれがそう、瑞穂に伝えた。無邪気な瑞穂は、うん、と首を縦に振って、私、お兄ちゃんのお嫁さんになる、と宣言した。

何故、おれは瑞穂を愛したのか。何故、実の妹を初恋の相手に選んでしまったのか。

明確な記憶はない。ただ、気がついたら、おれの頭の中には、瑞穂しかいなくなっていた。

瑞穂の吐息が聞こえ、おれは一段目で眠っている瑞穂を覗きこんだ。寝返りをうっている。愛らしく、美しい。

腰の部分、裾がめくれあがっていた。下着をつけていない瑞穂。むき出しになった未成熟な尻、太もも。おれは激しく勃起する。

何かに突き動かされるように、おれは瑞穂に覆い被さる。愛して
る。愛してる。愛してる。

衝動の名は闇。暗黒。その他ありとあらゆるマイナスを指すエネ
ルギー。

おれは瑞穂の股を開く。あるいは、拓く。そこには、まだ何にも
覆われていない、何にも隠されていない、少女の印が存在した。

感情の名は愛。おれは半ズボンを下ろし、下半身をさらけだす。

罪悪感芽生えない。何故ならば愛故の行為。おれを取り巻いて
いるのが暗黒のオーラだとしても、それはとめどない愛情から発生
した闇なのだ。

それが罪であるはずも、悪であるはずも有り得ない。

鼻息が荒くなる。心臓が破裂しそうなほどに脈打っている。間も
なく世界が変わる。間もなく、おれは真の男になり、瑞穂は真の女
になる。

聖なる予感が、福音のように頭蓋骨に響き渡っていく。

おれは、ペニスを膣に運ぶ。すでにおれと瑞穂の周囲は花園に変
化していた。花園を囲む新緑の木々は優しく萌え、小鳥のさえずり
は祝福に聴こえる。ここはエデンだった。おれと瑞穂の愛の世界。
おれと瑞穂以外の何者にもその侵入を赦さない、絶対不落の要塞。

ペニスが膣に触れる　その瞬間。

「お兄ちゃん」と瑞穂がいう。

ビクツと体が震え、群れからはぐれた子羊のように、おれは弱々しく、ゆつくりと、膺から瑞穂の顔へ視線を移した。

瑞穂は目を開けていた。それでいて、怯えることも、おれの勃起したペニスに驚くこともなく、ただ、無表情で、おれを見つめる。一筋の涙を流しながら。

エデンの空を、分厚い黒雲が覆い始めた。花園は枯れはて、木々は折れ、小鳥の祝福は鳥の罵声に変わる。

「駄目だよ」と瑞穂はいう。

「《それ》はいけないことなの」

延々炎炎

ペニスに違和感を感じて上体を起こすと、マリナがしゃぶっているのがわかり、彼女の茶色い長髪を驚掴み、そのままおれの眼前に引き寄せた。

唇から、だらしなく涎を垂れ流しているマリナの頬を、平手で叩いた。六分の力。これが愛情の基準値。これを上回れば、それは単なる暴力であり、下回れば馴れ合いにすぎない。

「誰が、しゃぶっていいといったんだ」

「だって、うなされてたから」

「おれが、か？」

「瑞穂ちゃんの夢でも、見てたんじゃないの？」

もう一度、叩き、マリナを睨みつける。

「おれが愛してるのはお前だけだ」

マリナは悪戯っぽく舌を出した。

「いいのよ、強がらなくたって」

「強がる？ 何を？」

「相手が実の妹だって、男と女である限り、というか、人と人である限り、好きになってしまふのは、イレギュラーでもなんでもないわ」

マリナの髪の毛を離して、おれはバスルームに向かった。

「ねえ、してくれないの？」

背後から、マリナの声。おれを嘲笑うようにも、憐れんでいるようにも聞こえた。

熱いシャワーを全身に浴びる。マリナにしゃぶられていたペニスはすっかり萎えていた。動揺している。マリナに瑞穂への愛を見透かされていることに。《いけないこと》を見透かされている自分に。

早く、殺されたい。瑞穂に葬り去られたい。おれにとてつもない罪悪があるというのなら、瑞穂の手によって断罪されたい。

何処にいるんだ、瑞穂。教えてくれ、お前に逢いたい。お前を抱き締めたい。お前の胸の中で、安らかな眠りを貪りたい。

扉が開く音。振り返らずとも、マリナが入ってきたことがわかる。彼女は何も喋らない。シャワーがタイルを叩く音だけが、やかましくバスルームに反響している。

背中に、マリナの乳房の感触。マリナの腕が、後ろから胸元に回ってきた。

抱き締められている。おれはマリナに抱き締められている。

「安心して」

「私はそばにいるから」

「あなたが、瑞穂ちゃんのことを愛していても」

「あなたのそばには私がいるから」

おれは、恐らく泣いていた。シャワーのおかげで、それは曖昧にすぎる涙だったが、確かに泣いていた。

何故、マリナのみを愛することが出来ないのか。マリナのみに、純粋な愛情を向けることが出来ないのか。こんなにもおれを愛してくれる、世界にただ一人のマリナを、マリナだけを愛し抜くことが出来ないのか。

おれは謝ろうと思い、しかし声に出せば、明らかに泣いていることがばれてしまうことを危惧し、また、瑞穂への感情を自ら認めてしまうことに恐怖すら感じ、ただ、唇を噛むことしか出来なかった。

「いいのよ、それで」

マリナはおれを、強く、優しく抱き締める。マリナはおれにとって、恋人である以上に聖母だった。

「私を愛さないで」

「瑞穂ちゃんだけを、愛しなさい」

煉獄 四

リビングのソファでうなだれるおれの両手を、横でマリナが優しく包んでいる。

八時を回っていた。そろそろ出社しなければならない。

「マリナ」

「なに？」

「頼みが、ある」

「瑞穂ちゃんを捜せばいいの？」

意志はいわずも通じる。おれはマリナから目を逸らした。それが肯定の証なのだから、我ながら矛盾していると思う。

「いいわよ」

慈愛に満ち足りたマリナの声。おれは、そのあまりに巨大で偉大な愛情に、潰されそうになる我が身を、必死に奮い立たせた。

「でも、命令して」

「何？」

「頼むんじゃないで、強制的な命令がいいの」

マリナがおれの両の頬に手を添えた。奈落のような漆黒の瞳が、おれを吸い込んでいく。おれはどこまでも堕ちていく。そんな錯覚に、目眩がした。

「私は一度、断るわ。あなたの命令を断るの」

マリナのいうことは解る。おれに制裁をさせたいのだ。おれの愛の力によって、強制的に動きたいのだ。マリナは受動では動かない動けない女だった。

「マリナ。瑞穂を捜せ」

「いやよ」

マリナの頬を叩き、首根っこを掴んでフローリングに押し付け、後頭部を踏みにじった。おれはベルトを外し、それで蛙のような体勢のマリナの尻を、打った。背中を、打った。

「もう一度いっぞマリナ。瑞穂を捜せ」

「いやよ」

さらなる力を。さらなる愛情を注ぎ込め　マリナが言っているのはそういうことだった。

マリオネットであるのは、サドの方なのか、マゾの方なのか。おれには、時折わからなくなることがある。テーブルに置いた煙草を一本取って、火をつけた。マリナの肛門に、フィルターを差し込む。

肛門から煙を登らせるマリナに、今度は優しく言ってやる。

「最後だ。瑞穂を捜せ。ノーなら、今度は燃えてる方突っ込むぞ」
マリナの震えが足元から伝わってくる。恐怖による痙攣ではなかった。肛門が灼き尽くされる痛みを想像し、恍惚としているのだ。
「わかったわ」

肛門からフィルターを抜いて、灰皿でもみ消した。

「京介の番号を知ってるな？ 奴と連携をとって、瑞穂の痕跡を辿れ。おれが帰ってくる前に、新しい情報を仕入れるんだ」

「出来なかったら？」

返答に戸惑う。マリナが不実を罰せられることを望んでいるのなら、マリナをなぶることは逆効果にしかない。

「何もしない。口もきかない」

「……絶対に、果たします」

おれはベルトを締め直し、玄関へ向かった。蛙の体勢のままのマリナが、行つてらっしゃい、と何事もなかったように言う。

延々炎炎

外回りを終えて、会社に戻ったのは八時過ぎだった。報告書を適当にでっち上げて、帰宅の準備を進めていると、隣に座る同期の柳瀬が声をかけてくる。

「高枝、お前、今日、暇？」

「いや、用事がある」

「つれねえな。せつかくおいしい思いさせてやろうと思ったのにさ」

柳瀬は軽薄を絵に描いたような男で、ビッチを抱くことが人生に置ける至上の目的であると信じて疑わない俗物だった。

営業の癖に肩まで髪を伸ばし、もうブームは去っただろうに、週に二回は日焼けサロンに通って茶色い肌を保っている。

「最近、すごいイベント見つけてよ。ジョニーっていうカリスマ占い師が主催してるセックスパーティーでさ。行きゃあやれんだよ、やりまくれんの」

ジョニー。あの変態占い師。柳瀬の口から意外な人物の名前が出てきたので、おれは浮きかけていた腰を椅子に戻した。

柳瀬はキーボードを叩いている。仕事に勤しんでいるわけではもちろんなく、インターネットのサイトにアクセスしているらしい。

「ほら、これよ」

得意気に柳瀬がディスプレイを指差したので、おれも覗き込んでみた。

黒い画面に、赤字で、ヘル・オア・ヘブンと表示されている。副題に、全ての罪を焼き尽くせ、とあった。

柳瀬がマウスを操作して、イベント告知のコーナーをクリックする。

解放祭と名付けられたイベントだった。先週おれが行ったのもそれだろう。一ヶ月単位のイベントらしく、どうやら今日が最終日にあたるらしい。

日付や場所の表示の下には、イベントの画像写真が掲載されていた。全裸の男女がホールを埋め尽くさんばかりにひしめいている。

「なあ、すげーだろ。行きたくなっただんじゃねーか」

ふと、思いたって、おれは口を開いた。

「この画像、いつのかわかるか？」

「あつ？ ああ、これは先月の頭のやつだよ。ほら、書いてあるだろ」

確かに、四月四日のものだった。

「他に画像はないか」

「なんだよ、やりたくなっただのか？」

「いいから、質問に答えろ」

柳瀬が睨み付けてきた。睨み返す。おれは睨み合いで負けたことはない。おれを知っている者が、おれと本気で揉めようなどと思う

はずがないからだ。

ただ一人、忌々しいあの京介を除いては。

気圧された柳瀬は軽く咳払いしたあと、あるぜ、といって全画像を順番に表示していった。

どれも似たような画像だ。変態どもが時にはペニスをしゃぶり、時には膣を舐め、時には挿入し、時には放尿している。

「こいつら、何かドラッグでもやってやがるのか？」

「いや、特にそれはねえよ。まあ、一人か二人はシャブ中も混じってるかもしれないがな。こんなイベントだしよ、いつマッポにしよっぴかれてもおかしくねーじゃん。だからジョニーがうるさいらしいんだ」

「柳瀬は、このイベント行ったことあるのか？」

「おれ？ いや、まだなんだよ。こないだナンパした風俗嬢に教えられてさ。せっかく知ったんだから、そんなやべえイベント行かないわけにいかないだろ。今日でとりあえず最終日らしいしさ。あ、これもういいか？」

見ていない画像がまだ二枚あった。昨日と、一昨日のイベント風景。画像をアップさせるのは早い。あれで、なかなかジョニーは几帳面なようだ。

おれは残りの二枚を表示するように、柳瀬を促した。面倒臭そうに柳瀬が従う。

ひしめき合う全裸の変態どもの写真　おれは思わず、デスクを叩いて、ディスプレイを口づけが出来る距離で凝視する。

全裸の変態に混じり、衣服を纏った高貴な女性の姿が隅の方に写っていた。彼女はジョニーに肩を抱かれている。そして聖女の微笑みを、画面越しにおれに投げかけていた。

聖女は、名を瑞穂といった。

メッセージ（１）

拝啓、 か 君。

その後いかがお過ごしだろうか。

イージーな人生は送れているかい？ 一応、あれから朝刊には一通り目を通して、君のお兄さん達の死亡記事を探してはいるが、幸いにしてそんなものは見当たらないので、とりあえず僕の方では勝手に、君が、まあまあそれなりに、ハッピーな思考回路で日々を過ごしていると仮定して、話を進めさせてもらうことにしよう。

君にこうやって連絡をとるのは大体一年ぶりだね。ひよっとすると、君の認識では、そろそろ僕は幻影になりつつあるのかもしれない。そう、つまり《僕なんかそもその初めから、存在していなかったんじゃないか》と、君はそんな風に思っていたりしないかい？

これが理由の一つ。非常に嘆かわしく、残念ではあるのだけれど、僕には友人が君しかないんだ。唯一無二の友人に、完全に忘れさられるのは誰だって辛いだろう？ というわけで、僕は存在しているよ。現実には。それを伝えておきたかったんだ。

もつとも、君の目に僕の姿は、以前の僕として映ることはないかもしれない。一年も経てば、僕のような曖昧で不確かな存在に対する《認識は変わってしまうものだから》ね。街角ですれ違ってても、君が僕に気がつくことは出来ないだろう。それは、ちょっと、しゃくではあるけれども、悲しいことだ。

まあいいさ。それでも、僕が君と関わった数週間という時間と事象の事実が《消えるわけではない》。君はもう、その事実には辿り着けないかもしれないが、あの時もいった通り、真実とはそういうも

のなんだ。悲観しても仕方がないし、涙を流せるような年齢でもない（本当のところ、僕は今いくつなんだろう？）。

そんなことよりも、重要な報告がある。僕自身の危機についての報告だ。実は今、僕はとある連鎖に巻き込まれている。捕らわれている、といった方がより正確かもしれない。比喩的な意味で、身動きがとれないんだ。

連鎖というのは、堅牢な牢獄と解釈してくれて構わない。そしてそれは、肉体ではなく精神が捕らわれる牢獄なんだ。精神が捕らわれるということはどういうことか、簡単に説明しよう。《時間が進まなくなる》んだ。

君はかつて、僕のことを魔法使い、と認識していただろう。そう、僕は君でいうところの魔法を使うことが出来た。あくまでも、僕の魔法は比喩的な魔法なのだけれども。

魔法、というのは、言い換えれば、《類い希な素質》が成せる業だ。滅多にお目にかかれない。類い希とはそういうことを指す言葉だというのはわかるね？ レアなんだ。マクロの視点からは、完全に淘汰されるレアっぷりだよ。

しかし。レアというのは、極端に珍しいだけであって、単一ではない。《類い希な素質》を持っているのは、何も僕だけではないということだよ。いることはいるんだ。そうだね、確率としては多分宝くじの二等に人生で三回当たったことがある人間と同程度のレベルでいる。

その、僕と同じように《類い希な素質》を持つ人間が、僕を捕らえている。腹立たしいことに、その人間自身には無自覚でね。

傍迷惑な話だよまったく。おかげで僕は十分長いこと、止まった時間の中で生きることを余儀なくされている（我ながら、変な表現だとは思う）。君風にいえば、マザーファッキンライフだ。

ここらでようやく本題に入ろうと思う。単刀直入に言おう、か君。助けてくれ、ヘルプミー。

いやはや、僕には、この連鎖というやつを《切り裂く》ことが出来る人間を、今のところ君しか思い浮かべることが出来ない。やれやれ、友人とはいえ、君のような若僧に頼むのは忍びないんだが。

とにかく、だ。君の力が必要なんだよ。ゆっくり、少しずつで構わないから。まずは僕を思い出すことから始めてくれ。いっつのことゝだかゝ、思い出してごらん、あんなことゝこんなことゝ、あつたゝでしょ。

また、連絡する。

「ブ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1914e/>

サディスティック・ラヴァー

2010年10月21日21時04分発行